



東っ子だより

夢にチャレンジ東っ子

～元氣いっぱい 笑顔あふれる 児童の育成～

令和2年度 三根東小学校
学校だより 第23号

令和 3年 2月 25日

文責 校長 中村 美枝子

「命について考える日」の集会で学んだこと －「天建寺渡し船転覆事故」から学んだ「いのちの尊さ」－

ほら、この風の中で、
凍える手に汗を流しながら
村のおじさんが、
こんなに沢山の船を出して、
根気強く、いねいに、
あなたを求めて
河底の砂を歩いていらした。
お父さんもお母さんも、
いいや、こんなに多くの人達が
必死にあなたを探しているのに
あなたはわからない。
あなたはわからない。
ただ「お父さん」「お母さん」と
大声で呼んでおくれよ。
あなたが水にはいった瞬間
呼んだように思ったように、
そして早くお家に帰っておくれ。



花くようの歌
一 ともに学びともに遊びし
わが友いすこつぼみのまに
まだこん春のさかりもまたで
げにはかなくも世をさりましね
あわれあわれわがなき友
二
ともにめでし花はさけども
帰きまされ友やいすかた
今日この庭にまつりつと
せめてわれらがまことうけませ
あわれあわれ友のみたま

行方の分からない我が子を探す家族の思い

土井外にある六地藏

心で聞いた「花くようの歌」

今から71年前の2月13日「天建寺渡し船転覆事故」で6人の児童が尊い命を失いました。その悲しい出来事を忘れずに語り継ぎ、命の尊さについて子供たちに考えさせるため、本校では2月13日を「命を考える日」として全校集会を行ってきました。今年は、コロナ感染症対策として各教室の電子黒板の映像による校長の話、そして、遺族の方からのメッセージを通して「命」について考えていきました。(2月17日の佐賀新聞にも掲載)

当時、9歳(3年生)で亡くなった福田みちおさんの姉、古賀絹子さんが弟を失った悲しみや苦しみを涙ながらに語られる姿から、子供たちは「自分の命が家族にとってもかけがえのないものである」ことに気づくことができました。同じく3年生で亡くなった小柳ヒロ子さんのご遺族は、亡くなった子供たちを供養するために建てられた六地藏前での供養を2月13日に欠かさず行われています。今年も供養の後に来校され、子供たちに「命を大切にしてほしい」という思いを伝えてくださいました。

校長の話では、転覆事故がどのような事故であったのか、その当時の家族の思いにも触れながら当時の様子を説明し、6月の全校朝会で取り上げた「自分の命は、たくさんの先祖とつながっていること」や「命は一人に一つしかないこと」「どんな生き物にも命があること」などを想起させながら改めて「亡くなった命は二度と帰ってこない、かけがえのないものであること」に気づかせていきました。これまで毎年「命を考える日」を経験し、1月の「いのちの教育プロジェクト」で自分の命と向き合ってきた6年生は、再度「天建寺渡し船転覆事故」のことを学び直し、命への思いを書き綴ってきました。集会では代表2名が全校のみんなに伝えたいことを、心を込め伝えてくれました。そのメッセージを裏面に掲載しています。二人の「命への思い」そして「自分のこれからに向けての思い」は、下級生の心を動かすメッセージにもなりました。

「命を考える日」を通して学んだことが子供たちの心に刻まれ「命を大切に精一杯生きる姿」につながっていくことを心から願っています。



弟を失った悲しみを語られる古賀さん



命を大切に伝えられる小柳さん



ご遺族・地域の方による命日の供養

「天建寺渡し船転覆事故」のことから学んだ命への思い

— 6年生からみんなに伝えたいメッセージ —

自分に一つだけの宝物	六年	秀島 聡史
みなさんは、自分の命をすてて、他の人の命を助けることができますか。		
昭和二十五年二月十三日に天建寺渡し船転覆事故がおきました。その時はまだ橋がかかっていませんでした。その日の気温は一、五℃とても寒かったです。しかし子ども達は元気に登校していました。渡り船には、小学生二十七名、中学生十四名、一ばん客二名を合わせて四十三名乗っていました。もう少しで岸につこうとしたとき、たくさん乗っていたので、船の中に水が入ってしまいました。水で足がぬれた子ども達は、びくびくして、いっせいに立ってしまいました。寒い冬の中の水に全員はうりこまりました。上級生は自分のことからではなく、他の下級生を助けました。そのために、助けた後、水に流される人もいました。その中には、はくたちと同じ学年の末次さんという人がいました。末次さんは自分が泳げない中、下級生を必死に助けました。ほくは末次さんみたいに、自分のことをなげ出してまで、下級生を助けるなんてすごいことだと思っています。こんなことみなさんにはできませんが、ほくにはこんなことは勇気がなくてとてもできません。この転覆事故でなくなつたのは六名の方でした。その方たちの遺族は何で他の子ども達はかえってきいてるのに、なぜ自分たちの子はかえってこないだろうと、とても心配していたと思います。ほくも家族がかえってこないなんて、考えるだけで、とてもいやになります。事故から四十二日後亡くなった方全員の遺体が見つかりました。家族のかたは、家族がせくな、たまたま、とてもしんじれないと思います。命はがざりのある、神様からあたえてもらった時間なのです。それを忘れないようにしましょう。命はとてもとうといものです。自分に一個だけの本当の宝物ということ胸にささめましょう。		

6年 秀島 聡史さんからのメッセージ

生きていくということ	六年	山川 なな
昭和二十五年二月十三日、午前八時十分、天建寺渡し船転覆事故がありました。この事故で、六人の方の尊い命がなくなりました。たかの家族、友達などさまさまの人が、深い悲しみにとらわれました。		
当時は四人の方が行方不明で、延べ三十五人の方が死力をつくし探しまわりました。探している人はどんな気持ちだったのでしょうか。他の子ども達は、帰ってきいているのに、自分の子どもだけ帰ってこない。大切なわが子の帰りを待つ両親や兄弟の方々は、どんな気持ちだったのでしょうか。考えるだけで、胸が苦しくなりそうです。みなさんも考えてみてください。ある日、つぜん、大切な家族がいなくなってしまう時のことを。		
行方不明の方の内、二人のい体はしばらく見つかりませんでした。その間、家族はどう思っていたのでしょうか。少し想像してみてください。心の底ではわかっていて、それでも、もしかしらたら、どこかで生きているかもしれない。		
という希望を抱けられず、なみだを流し、悲しみにあけられる毎日。子どもは、い体はもどってきた時でも、やはり、とても悲しい。たけしう、こんなことは、もう絶対に起こってほしくないこと。この事故の時のように、もしあなたとてな、たり、回りのたくさんの人を悲しませてしまっています。えうなら、毎日、しかりと前を向いて進んでいって下さい。命は一人に一つしかありません。一つがなくなると、時もあり、命は有限です。えうの中で、この事故でなくなつた六人の方のことをたいては、いけません。えうの人々の思いを受けつぎ、えうの人々の分まで精一杯生きていきましょう。えうの命は、いっとう、たけしう、だ、たり後悔		

6年 山川 ななさんからのメッセージ

の残りないように、生きていきたいと思います。有
限な命、自分の命も、人の命も大切にしたい。な
ら生きていく、生きていこうという奇跡に感謝
しながら、進んでいきます。



二人からのメッセージに聞き入る子供たち